

往復書簡(後編)

北海道で小麦や甜菜を生産する「前田農産食品合資会社」の前田さん。前編で話のあったJGAPや「現代版農業遣唐使」についてお考えを聞かせていただきました。

拜啓 高木 勇樹 様

北海道十勝の今年の天気は異例つくしです。5月8日の風速31mの猛烈な風で甜菜の種をまき直したことから始まり、5月下旬には気温が32℃と全国でも最も暑くなり、6月〜9月までは曇天長雨。しかも、7月下旬の小麦の収穫時期に雨が降り、収量・品質共に前年より低下しました。さらに追い打ちをかけるように台風が立て続けに4つも通過し、畑の表土や作物のかん水、農産物集荷・加工場や農産物の流通にとって重要な道路も被災に遭いました。毎月のように「観測史上で一番の〜」という言葉がニュースで見聞きする気象変動の大きさに、味方でもあり脅威でもある自然の中で仕事をさせてもらっていることを、今まで以上に痛感する年になっています。

さて、お返事並びに叱咤激励をいただき誠にありがとうございます。農業から食へという流れは言葉では理解できても、生産に特化すると見えないことが多くあります。そのため、パンを食べる人々と出会うと、小麦を製粉し、流通してパンになるという食の一端を担っている喜びを感じることができ、もはや「小麦畑が出会いの場である」という認識です。畑で育てる小麦やポップコーンを通じて、「人が活きる農業経営とは何か」を具現化しようとしており、「他人がすぐやりたがらないものやこと」にフォーカスすることで、他社と差別化し、「前田農産の強み」を磨かせてもらっています。

例えば、農業管理工程(GAP)ですが、農業輸出国ではGAPも農場HACCPも常識になっていると感じています。私は、昨年1年間、JGAP穀物版技術委員をさせていただきました。JGAPには、農場経営全体や労働条件、環境配慮、クレーム対応、肥料・農薬管理など、多岐にわたる注意事項が数多くあり、農業法人等には絶対に必要な管理工程や規則になります。そして、生産基盤がある程度体系化することで、取引先との強固な信頼や、安定栽培から6次化への

ステップに繋がると認識しています。

「現代版農業遣唐使」について、従来の農業高校、大学、日本農業経営大学校、J-PAOも各地から集まった違った考えをもつ人たちの集合場であり学びの機会です。将来、その地域を担う1次生産者たちが、村社会から一度出て、国内海外を問わず、言葉や文化、対人農業、技術など今までは違う環境に自らの身を置くことで、広い考えを持ち、そして、自分の強みは何か、経営資源をどこに集中させたらいかにについて考える体験をすることが重要になってきます。昔から、「習うより慣れる」という言葉がありますが、自らこのような経験を買っ出てくることは、経営への重要な投資だと思います。

理事長が提唱されている「和才洋魂」は、西洋の魂を理解できる場所に立ち、日本らしさに改良することだと私は捉えました。これから、海外情報に目配りしたり、海外に行き現地の様子を自分の目で見て、先進IT技術を導入したりしつつも、「日本やその地域らしさ」、その農場らしさを磨き栽培方法、マーケティング作りや人のネットワーク作りをして、持続性ある農業を実現していきたいと思えます。「夢を持てる農業」は国の政策ではなく、現場の我々生産者が一夢を持って農業を継続させる「ことだと肝に銘じてやっています」。

平成28年10月吉日

敬具

前田 茂雄 (まえだ しげお)

1974年 北海道 本別町 生まれ
1999年 前田農産食品合資会社に入社
前田農産食品合資会社 代表専務取締役。2男3女の父。東京農業大学卒業後、テキサスA&M大学、アイオワ州立大学で農業や流通を学ぶ。JGAP穀物評議委員(2015年)。好きな言葉は「温故創新」。



拝復 前田 茂雄 様

お手紙をお読みし、テレビの映像、新聞報道を重ね合わせ、お手紙の記述がより立体的な広がりをもつて分かるような気がしました。おそろくそれでも全体像をほんの一部切り取ったに過ぎないでしょう。とんでもない現実が襲いかかっていたのだということだけは想像に難くありません。

自然の恵みと脅威はコインの裏表なのでしょう。古来日本人はこれを神の仕業とし、感謝と畏れの気持ちで祈り、祀り続けてきたのでしよう。

どんなに進んだ科学技術・文明も自然の前では無力であることを共通のDNAとして持っているからこそ、日本人はいかなる災厄も力を合わせて乗り越えてきたのだと思います。

貴兄のことですから、このようなリスクへの対処は抜かりなくなさっておられることと思います。

「前田農産の強み」として、農業から食へという流れを「他人がすぐにはやりたがらないものやこと」にフォーカスすることで「人が活きる農業経営とは何か」を具現化しようとしていることを挙げておられますが、同感です。

例としてGAP、農場HACCPも農業輸出では常識になっているとのこと指摘は、わが国の農産物輸出戦略の早急に克服すべき「弱点」を見事に浮き彫りにしていると思います。

前回のお手紙でも申し上げたように、農業者も消費者もこの大事さ―食の安心・安全の原点であること―に早急に目覚める必要があります。国は、この大事さのPRと、GAP、農場HACCPに取り組みやすい環境づくりに注力すべきだと思います。

また、このGAP、農場HACCPは、取引先との強固な信頼や安定栽培から6次化へのステップにつながるのと的確に指摘されているように、正に「経営」の質を高めるのにも必須のツールだということを「前田農産」が証明しているのです。地域を巻き込み日本全体に及ぶ一大運

動に発展させてください。

「和才洋魂」は、実はオランダ農業のシンボジウムに参加した際、締め言葉として使ったのです。何故オランダはあんなに狭小で海抜下の悪条件のもとで世界第二位の農業輸出国なのか。曰く、産官学の連携で徹底した技術開発と強みを発揮できる輸出戦略作物の選択、海外情報の収集とロジスティックの総合化などであると。これはとりもなおさず悪条件を克服しようとするオランダ魂といってよいのではないかと、オランダの開発したシステムを応用する才は今や日本は持っているではないか。とすれば学ぶべきは、オランダ魂つまり実行あるのみということでしょう、という意味で使ったのです。

貴兄の西洋の魂を理解できる場所に立ち、日本らしさに改良することとの捉え方はさすがです。

今までも貴兄の経営は国の政策に依存してのものではないです。これからも、いつまでも夢を持ち続け、その夢の実現を通じ、持続する経営を深化・進化させ、いずれ、日本農業のリーダーとならんことを期待しています。

平成28年10月吉日

敬具

高木 勇樹 (たかぎ ゆうき)

- 1943年 群馬県生まれ
 - 1966年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任
 - 1998年 農林水産事務次官、2001年退官
 - 2002年 ㈱農林中金総合研究所理事長
 - 2003年 農林漁業金融公庫総裁、2008年同公庫退任
 - 2007年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長
- 現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

